



福島医大ふくしま子ども・

女性医療支援センター長

水沼 英樹氏

これに対し、閉経前の女性では患者さんの臨床背景（年齢、挙示希望の有無など）や症状の程度によりその取り扱いが多様です。月経の量が多く筋腫が大きく周囲臓器への圧迫症状が強い場合や薬物療法ではコントロールが困難な過多月経や月経困難症、あるいは貧血などの症状を伴う場合に

筋腫が大きくなりますが、どれを選択するかは筋腫の大きさ、回数、発生部位により決められます。一方、薬を用いて筋腫を小さくする方法もあり

がりますが、どれを選択する場合は筋腫の大きさ、回数、発生部位による副作用も出てきますので、長期間の使用は原則勧められません。どうしても長期間の使用が必要

# 個別的に治療法選択

子宮筋腫は良性腫瘍です。無症状の場合には経過観察で大丈夫です。ただし、急速にサイズが大きくなるような場合には、子宮筋腫ではなく悪性の子宮肉腫との鑑別が必要となります。子宮筋腫と言われている場合でも放置せず精密検査を受けてください。前回もお話ししましたが、子宮筋腫は閉経後には小さくなります。したがって、閉経後でもあるのも関わらず、子宮が大きくなる場合には特に注意が必要です。精密検査が必要であり、悪性を否定できない場合には摘出術が必須となります。

そのために月経痛や貧血の合併があっても手術を行うのではなく、まずは内科的にこれらの症状の緩和が可能ならば対症的な治療法として鉄剤投与や止血剤の投与、あるいは低用量避妊薬があるいは低用量避妊薬が選択されます。しかし、

は子宮摘出が選択されます。GnRHアナログという薬を用いて月経を抑え、一種の閉経状態に

ます。GnRHアナログの場合には、これらの対策が求められます。

ただし、妊娠（にんよう）性を残す必要がある女性では子宮を摘出してしまいうわけには参りませんので、その場合には筋腫のみを摘出する方法と再び筋腫が大きくなると再び筋腫が小さくなる方法があります。このため（筋腫核出術）が選択されます。手術方法には開腹術や腹腔（ふくろう）鏡下手術、子宮鏡下手術に筋腫を小さくしておく

念ながら効果は一過性的に閉鎖して筋腫を小さくする方法や超音波を用いて筋腫を小さくする方法もありますが、残念ながら全体的に筋腫を小さくする方法は、残念ながらありません。